

「パーキンソン病 診療ガイドライン2018」の 改訂ポイント

KEY WORDS

- GRADE system
- 治療アルゴリズム
- クリニカルクエスション
- L-ドパ
- MAO-B阻害薬

Revised points of clinical practice
guideline for PD 2018.

Yasushi Shimo (先任准教授)
Nobutaka Hattori (教授)

順天堂大学医学部附属順天堂医院脳神経内科

下 泰司, 服部 信孝

はじめに

2018年5月に『パーキンソン病診療ガイドライン2018』¹⁾が発刊された。これまでのパーキンソン病治療ガイドラインを踏襲しつつ、新規の項目も設け、より包括的な内容となっている。本稿ではこれまでのガイドラインとの相違点を挙げ、今回のガイドラインの特徴について概説する。

I. 序章について

今回の診療ガイドラインはこれまでの治療ガイドラインと異なり、より広い範囲の利用者(患者やパラメディカルなど)を想定して作成された。そのため、新たに序章を設け、そこでは疫学、診断基準、遺伝子、環境因子などパーキンソン病の一般的なことについて解説をしている。このなかには2015

年に発表されたMovement Disorder Societyから発表された診断基準も掲載してある。そのため、パーキンソン病診療を専門としない一般医家にとっては入門書として利用することが可能となっている。

II. 第I編について

これまで通り、各薬剤および定位脳手術に関する解説が記載されている。2008年10月以降のエビデンスについて解説を行っている。

III. 第II編について

1. パーキンソン病治療に関するエビデンスに基づいた治療方法

今回のガイドラインでは、早期および進行期パーキンソン病における治療を、ガイドライン作成のための国際標

SAMPLE